

Title	「地域政策」でアフリカ入門を実施して：アフリカ地域研究のススメ
Sub Title	From the experience of teaching undergraduates about Africa : an invitation to Africa
Author	國枝, 美佳(Kunieda, Mika)
Publisher	慶應SFC学会
Publication year	2025
Jtitle	Keio SFC journal Vol.24, No.2 (2024.) ,p.152- 159
JaLC DOI	10.14991/003.00240002-0152
Abstract	SFCの「地域政策」の授業ではアフリカの教育、保健医療、文化、自然環境、インフラ、経済、雇用、技術革新を学び、欧米、中国、日本の対アフリカ地域政策についても考えてきた。アフリカの若い人口、多様な価値観や行動に触れることでいろいろな可能性を見ることができる。慶應義塾は近年、「未来先導」するリーダーや起業家の育成、イノベーションに力を入れていて、アフリカに学ぶことが多い。
Notes	特集 地域研究リテラシー：SFCにおける現在と展望 投稿：実践報告
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11671240-00240002-0152

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

[投稿：実践報告]

「地域政策」でアフリカ入門を実施して

アフリカ地域研究のススメ

From the Experience of Teaching Undergraduates About Africa

An Invitation to Africa

國枝 美佳

U Can Do IT 合同会社代表社員

Mika Kunieda

U Can Do IT LLC CEO

Correspondence to: mika.kunieda@gmail.com

Abstract:

SFCの「地域政策」の授業ではアフリカの教育、保健医療、文化、自然環境、インフラ、経済、雇用、技術革新を学び、欧米、中国、日本の対アフリカ地域政策についても考えてきた。アフリカの若い人口、多様な価値観や行動に触れることでいろいろな可能性を見ることができる。慶應義塾は近年、「未来先導」するリーダーや起業家の育成、イノベーションに力を入れていて、アフリカに学ぶことが多い。

For five years at Keio SFC, students studied about Africa's education, healthcare, culture, natural environment, infrastructure, economy, employment, and technological innovation, also reflecting on Europe's, the United States', China's, and Japan's policy towards Africa. Exposure to Africa's young population, diverse values, and actions opens up a wide range of possibilities. In recent years, Keio University has been focusing on cultivating "future-leading" leaders and entrepreneurs, as well as promoting innovation. Africa can be a field for these future leaders as young African entrepreneurs are innovating with minimum resources and capital. Through African regional studies which demonstrate pathways to the realization of a sustainable society, students can be trained to lead the way into the future.

Keywords:

アフリカ地域研究、持続的開発、地域政策、ユース、未来先導リーダー

Africa studies, sustainable development, regional policy, youth, future leaders

1. 緒言

地域研究では、文献資料、統計データ、フィールド調査結果などを分析し、社会の現状を把握した上で、未来の社会が直面する可能性のある課題や問題を予測する。そして、様々な学問分野の知識と方法論を用いて、未来の社会が直面する可能性のある課題や問題を分析し、それらを解決するための政策や提言を策定することを目的とした総合政策学(慶應義塾大学 SFC, 2022)同様、地域研究は地域の課題を特定し、実行された政策や提言の効果を評価し、より良い地域の実現に向けて貢献することを目指している。

現在世界が直面している地球温暖化、生物多様性喪失、資源枯渇などの課題解決をし、持続可能な社会の実現が求められる。アフリカは、持続可能な社会の実現に向けた可能性を秘めている。なぜならアフリカの人々は、伝統的な知識や文化に基づいた持続可能な生活様式を長年培ってきたからである。また、アフリカ各国は、アフリカ連合(AU)などを通じて、地域的な協力を進めて、新たな課題に対応しようとしている。アフリカは、世界の人口の約17%を占める約13億人が居住する大陸で、2050年には世界の人口の4分の1の25億人を占めるようになり、近未来の巨大な市場になると言われている(マグランら, 2023)。一方で、政治不安や汚職、人口増加、気候変動によって拍車がかかる砂漠化や干ばつ、そして食料不足などの課題を抱えている。

日本はアフリカに対して1993年からアフリカ開発会議(TICAD)という多国間フォーラム型外交を展開してきた。TICADでは、冷戦終結後のアフリカへの援助疲れを経て、2001年の同時多発テロ事件を契機に安全保障と対テロ対策として貧困削減が重視されるようになった。そしてMDGsやSDGsの達成に向けた人間の安全保障分野の支援が強化された。最初のTICADから30年間でアフリカの経済成長が実現そして加速し、TICAD開始当初中心だった開発援助からビジネス促進へ重点がシフトしてきた。また、中国-アフリカなど他の対アフリカフォーラムと競合するようになっている。

近年のTICADはアフリカの多様性に対応しつつ、SDGsの達成、民間セクターの参画促進など、新たな課題にも取り組んでいる。援助から民間投資への転換は、雇用機会の創出、イノベーションの促進、そして経済成長につながる事が期待されている。また、産業の多角化も促進される。財務に目を向けると、円借款の債務取り消しが進められる一方で、中国借款によるインフラ整備が進み、再び債務問題は深刻化している。実際、一部では債務不履行(デフォルト)が発生して、財政破綻寸前まで来ている国もある。

日本は現在、引き続きアフリカの人づくりを進めながら、

時代に合わせた「アフリカ・グリーン成長イニシアティブ」の立ち上げやスタートアップ支援の重視を表明している。そのために政府は日系企業によるアフリカへの進出と投資の拡大を期待している。

アフリカの多様性と可能性を学生に伝えようと、筆者は「地域政策」という授業名で2019年度から5年間、アフリカ入門を実施してきた。以下はその実践報告である。

2. 「地域政策」でアフリカ入門

2.1 「地域政策」授業概要

2019年度から5年間、春学期に学部生対象のアフリカ入門を「地域政策」という名で開講した(表1)。SFCには日本語で実施するアフリカ入門の授業がなかったのが開講の動機である。一通りアフリカ地域のことを理解した上で、日本、中国、欧米の対アフリカ政策、日本とアフリカ、自身とアフリカのつながりについて考えるきっかけをつくることを目的とした。具体的な授業目標は「アフリカの多様性、問題や可能性についてグループワークやそのグループによるプレゼンテーションを通して学ぶ」と設定した。

2.2 「地域政策」履修選抜

アフリカ入門と設定したことから「楽単」と思われることも危惧した。学生が履修登録をして、試験だけで単位が取れないようにするために履修選抜を丁寧に行う必要があった。

表1 「地域政策」授業の開講形式および年別履修者数

	開講形式	履修者数
2019 春	対面、火曜4限	41 (総23, 環17, 他学部1)
2020 春	対面、	47 (総35, 環12)
2021 春	オンライン、発表のときのみ教室	32 (総26, 環6)
2022 春	基本対面オンライン、木曜日3,4限	15 (総11, 環3, 他学部1)
2023 春	基本対面だが、発表のときは必ず教室	44 (総36, 環6, 他学部2)

毎年履修者選抜を実施した。「私とアフリカ」について半ページから最大1ページ書くという事前課題を課した。

そして初回の授業で履修希望者がどれほどアフリカの知識があるかを見るために、アフリカ白地図に知っている限りのアフリカの国名を記入してもらった。初年度はそれなり、最終年度は他キャンパスから来た数名の学生がSFCの学生よりもよい成績を収めるという結果であった。

2.3 「地域政策」授業の工夫

2.3.1 テーマ、サブ地域、英語スライド、開講日

アフリカについて知識のない学生に対して90分間、アフリカの文化、教育や保健の状況、経済、農業、輸出入、産業、土着の知恵やイノベーションについて一方的に講義をしたところで、学生の知識が増えないどころか、関心も生まれないと考えた。そのため学生が一学期に3回プレゼンテーションして少なくとも3つのテーマ×サブ地域にそれぞれに詳しくなるよう工夫した。外務省の定義するアフリカの5サブ地域(図)でいろいろなテーマを取り上げることにした。テーマとサブ地域の組み合わせが一致した2～3人がそのテーマを調べて(あるいは役割分担をし)、授業前までにグループプレゼンテーションを提出してもらった。発表は日本語だが、国際学生がわかるようにプレゼンテーションを英語で書くという条件をつけた。あらかじめ提出されたプレゼンテーションに対して、講師が出典や引用元、英語をチェックしたり、コンテンツについて助言したり、授業最後の補完コメントができるよう事前学習に活用してもらった。授業の基本構成は、5つの班がそれぞれ10～15分くらいの発表をして、最後の5分程度で講師からコメントや補足をした。初回の授業で、連絡を取り合うためにCNSのログイン名と名前を予定の3か所書き入れてもらうのだが、このような方法がはじめての学生が多く、かなり時間を要した。また、初回の授業に来ない上級生が多く、後からの調整も大変であった。

人気のあるテーマとサブ地域の枠(表2)はすぐに埋まった。特に希望が集中したテーマはアフリカの教育で、毎年人数を調整せざるを得なかった。5つのサブ地域のうちサファリで有名な東アフリカのケニアやタンザニア、ウガンダがいつも人気であった。

アフリカの文化(音楽やファッション)の回では音楽や映像が共有され、アフリカ音楽の“推し”が紹介されるライブ感満載のプレゼンテーションが多かった一方で、輸出入や経済関連の話題は一人で発表ということもあった。コロナ流行前に実施した授業では一人で発表する選択をする学生は少なかったが、コロナ禍そしてコロナ禍後はグループワークが難しかったのか、15分一人でプレゼンテーションをする学生もいた。テーマやサブ地域によって立候補がなければ、そのテーマとサブ地域は実施されなかった。

いろいろな学生にアフリカに関心を持ってもらうために、語学や研究会となるべく重ならないよう開講時限はほぼ毎年変えた。また当初は1限で予定していたグループ発表がすべて消化できず、休みに食い込むことがあった。そのため、次年度からは2限続きにして、春学期の前半で開講した。関心の高いテーマは重点的に、関心の薄いテーマも1～2



図 アフリカのサブ地域 (出典：外務省)

表 2 テーマとサブ地域 (2022 年春学期の例)

		北アフリカ	西アフリカ	中部アフリカ	東アフリカ	南部アフリカ
第 1 ラウンド						
4 月 14 日 3 限	第 3 回 アフリカの保健医療					
4 月 14 日 4 限	第 4 回 アフリカの教育					
4 月 21 日 3 限	第 5 回 アフリカの文化 (音楽やファッション)					
第 2 ラウンド						
4 月 21 日 4 限	第 6 回 アフリカの自然環境と 農業					
4 月 28 日 3 限	第 7 回 アフリカの インフラと経済発展					
4 月 28 日 4 限	第 8 回 アフリカの 人口増加と都市化					
第 3 ラウンド						
5 月 12 日 3 限	第 9 回 アフリカの経済(輸出入)					
5 月 12 日 4 限	第 10 回 アフリカの インフラ(エネルギー、水、交通)					
5 月 19 日 3 限	第 11 回 アフリカの 雇用・労働と移民					
5 月 19 日 4 限	第 12 回 アフリカの 知恵と技術革新					
5 月 26 日 3 限	第 13 回 欧米中の 対アフリカ地域政策					
5 月 26 日 4 限	第 14 回 日本の 対アフリカ地域政策					

つのプレゼンテーションでカバーできるようにするのが狙いであった。しかし、このやり方は裏目に出て、結局履修者が激減し、プレゼンテーション総数は確保できなかった。

コロナ対策で教室の収容人数制限があった年度は「発表のときは教室」とし、発表がなければオンライン参加を可とした。ただしオンラインだと聞いているふりということ

も考えられたため、オンラインフォームで感想や一言を書いてもらうようにし、毎週入念にコメントの質を確認した。授業内で時間の余裕があれば、よいコメントをスクリーンに映し出し、褒めた(表3)。また、時間内に「発表がよかった」と書いて提出する人が増えてくれば、このようなコメントは評価しない(出席としない)と注意をした。

すべてのプレゼンテーションファイルを発表後1～2週間のうちにPDFに変換し、SFC-SFSや後継システムのSFC Online Learning System (SOL) などその時のシステムで公開した。そして学期の最後で公開されたプレゼンテーションの中から内容のよかった、あるいは斬新だった話題を、テーマそしてサブ地域で偏りがないようバランスよく拾い、ミニクイズ(表4)を実施した。基本的に他の人

のプレゼンテーションをまじめに聞き、コメントを書いていればわかるような内容だったため、テストではなく、クイズとした。それでも満点が出ることはほとんどなかった。内容を覚えていても地理の基礎がないため結局その回答に該当する国の位置を白地図で特定できなかったり、国名を覚えていなかったりしたためである。

地理の基礎が不足している表れは他にもあった。白地図には中東も入っており、事前に中東の国は記入しないとあってあっても、アフリカと勘違いしてか国名を記入する人がいた。また、年を経るごとに、特にコロナ禍後は学生の関心がさらに内向きになったのか、グループワークをすることに慣れていないのか、プレゼンテーションの質が低下した。オンラインで大学生活をスタートさせた学生は相

表3 履修者コメントの例

2021 年春学期 第5回アフリカの文化(音楽ファッション)		
西アフリカ発表の感想	東アフリカ発表の感想	南部アフリカ発表の感想
1 もう本人が个性的でおしゃれ。音を使うプレゼンは印象に残っている。TikTokを知らない人にもわかるよう説明するのが優しかった。音楽を需要の面から語るのが興味深かった。音楽以外の世界との関連が示されることで、親しみやすく話が聞けた。2 プレゼンターの視点がそれぞれまるで違うのがよかった。実際の食文化だけでなく、背景から説明されておりよかった。写真のサイズが大きくていい、お腹減ってきちゃう。食を通した他国との関わりが興味深かった。情報の信頼度に応じて言い切らないのが素晴らしい。レシピや栄養素が聞けると味の想像が膨らんだ、できれば調理方法も知りたかった。Twitterの引用は親近感もあって、面白かった。実際の食レポは特に参考になる！ レストランの紹介も実用的でいい！	1 実際に挨拶を試すのはとても面白い！ ポップな例で関心が惹かれた、話しかけるスタイルで進んで行くので自発的に聞く耳を持てた。よく練習されたプレゼンだった。実際に音源があったり、村や住居の画像が多く、イメージが付きやすい。合唱と独唱の違いがあることは驚きだった。台本を作ってきていて真面目だなと思った。2 現地語の併記は大事な要素だなと思った。フランクな口語が混ざること聞きやすかった。布が表現方法のツールとして使われている事実が面白かった。ソースを口頭で明示するのが信頼感あった。リミテーションが示されているのが客観的なプレゼンだと思った。	1 背景画像がかわいい！ 視覚情報と言語情報が同じスライドで示されていて、興味をそらされた。アフリカと聞いて想像するような模様や色以外のものも出てきて新鮮だった。Iで始まる用語が多いのは何故なのか気になった。民族ごとに分けられており、南アフリカといっても様々な衣装があると知れた。それぞれの装飾具に対して意味や素材などまで説明されており、面白かった。結婚の重要性が大きいことが服飾から分かった。2 疑問を混ぜるスライドがあることで主体的に考えることができた。聞き手と同じ目線に立った、知っているものの差異という視点が、説得力を持っていた。個人的な話をする事で関心が惹かれた。一枚のスライドに情報が詰め込まれていないので見やすかった。カウンターパートへの導入が滑らかで、ワンステップずつ話に付いていきやすかった。日米の思考様式の比較は面白かった、できればアフリカの国々における思考様式も知りたかった。熱量が大きいスピーチだったので、聞き続けられた。
私はアフリカの音楽というと古典的なイメージを持っていたのですが、プレゼンで聞いた音楽がとても近現代の雰囲気があり、とても驚きました。アフリカの料理はあまり食べたことがなくて少し興味があったのですが、プレゼンの内容を見て自分の口には合わないかなと思いました。	とてもユニークな楽器が多く自分も使ってみたかなと思いました。また、歌のフリースタイルダンジョンのようなものを紹介されていたのですが、あれは日本でもやってみると面白いのではないかなと思いました。アフリカのデザインはとてもカラフルなものが多いなと感じました。また、用途が本当に広くさまざまな応用ができるのは面白いと感じました。	日本の正装が黒色なのに対して、アフリカの正装の色が白なのは面白かったです。また、アフリカのファッションにはアクセサリの一つ一つにしっかり意味があるのは驚きました。自分は人種差別というものではなくせるものだと考えていましたが、今回の価値観の違いの話を聞くと互いに完璧に理解し合うのには相当な時間を要するのかなと感じました。あと、私はアメリカ人とナイジェリア人だったら服装や体格などのさまざまな要因が関係してくるのではないかとおもいます。
しっかり食べに行っていた点にすごく感心しました。Mohammed Laiのくだりなど、面白おかしくも社会的な事例を組み込んでくれたので印象的でした。その地域の方々がどれほどJollof riceに対して強い情熱を持っているかわかりました。うまくコミュニケーションが取れずチームワークは円滑ではなかった点については次回に向けての課題点したいと思います。Moin moin 食べてみたいです。	Kangaの布に書き込みがあり、Kangaをもらって言葉によって相手が自分のことをどうみているのかわかるという点が花言葉みたいで面白かったです。コットン産業が古着により廃れてしまったという話を聞いて、以前タンザニアに行った時にToms(一足買うと一足寄付)というブランドの靴が市場で出回っているという話を聞いたのを思い出しました。良かれと思ってやっていることが実際は国家の衰退に加担しているという問題の背景には募金やドネーションされたものがどういった経緯を経て実際に必要とする人々の手の内に入るかという点に無関心である姿勢が関与しているのではないかと感じました。	南アフリカだけに囚われず、アフリカを学んでいく上でアフリカの文化とは何かという点に着目していたのは素晴らしいと感じました。その上、表象や言説についても考慮されているプレゼンテーションで、アフリカの諸事情について学んでいく上で一度振り出しに戻りどのような姿勢で「アフリカ」を学んでいくのかという点の重要性を再度考えさせられました。

表 4 学期末クイズ出題例

2019 年春 地域政策 学期末 quiz 以下の質問に該当する国名を白地図に記入せよ。 1) ドローンで血液輸送をしているイノベーションの国 2) アフリカ最初の原子力発電所ができた国 3) 世界で唯一のルイボスティー生産国 4) 5) 6) 2014-15 年にかけてエボラ出血熱が流行した 3 つの国 7) アフリカ最大の都市が首都の国 8) 現在、最も人口の多いアフリカの国 9) アフリカ連合 (AU) の本部がある国 10) 南部アフリカ開発共同体 (SADC) の事務局のある国	
2022 年春 地域政策 学期末 quiz 以下の文に該当する国名を白地図に記入せよ。 1) アフリカーのお金持ちを輩出している国 2) ジョロフライスが有名な国 3) 慶應中等部の商品開発に関わり会社が 2022 年現在営業している国 4) 1994-1996 年に人口が減少した国 5) 東アフリカで水と衛生の評価指数が最も低く、水タンクを転がす Hippo Roller が見られる国 6) 南部アフリカで、中国資金で建設された鉄道のある国 7) トロフィーファームのある国 8) 2022 年 8 月に TICAD 8 が開催される国 9) ロシア傭兵と“契約”した国 10) 担当教員がおんぶ布プロジェクトを実施した国	
2023 年春 地域政策 学期末 quiz (GIGA 生のための英語併記) 以下の文に該当する国名を白地図に記入せよ。Write the number) and country name in the map 1) 2) コンゴ (川に由来) とつく国の正式名称 Which two countries which have “Congo” (for the river) in their names? Differentiate the two. 3) レインボーネーションという別名を持つ南部アフリカの国 The country in Southern Africa also called Rainbow Nation 4) 5) “ギニア” が国名に入っている 3 か国のうち 2 か国の正式名称 Identify two out of three countries in the continent that have “Guinea” in their names. Differentiate the two. 6) 東アフリカでシリコンサバンナと呼ばれている国 The country in Eastern Africa also called “Silicon Savannah” 7) オリーブオイルやアルガンオイルを生産する北アフリカの国 The country in Northern Africa which produces olive oil and argan oil 8) 北部アフリカにある天然ガス・石油が豊富でロシアの友好国 The country in Northern Africa which has abundant natural gas and oil and is an ally of Russia. 9) ロシア傭兵と“契約”した西アフリカの国 The country in Western Africa which contracted with Russian mercenaries 10) 担当教員が予防接種おんぶ布プロジェクトを実施した西アフリカの国 The Western Africa country where your lecturer conducted a pilot project of the vaccination baby-wrap	

談できる友人がいなかったり、授業に対しての事前の先輩情報がなかったりしたことから、「地域政策」は実はアフリカ入門だということに気が付かない学生がいたのかもしれない。あるいは単にアフリカに対する関心が薄れたのか、全体的に開講初年度と比較してアフリカに対する熱量は弱かった。

「プレゼンテーションの質」や「熱量」の評価基準は、プレゼンテーションの長さやテーマの深掘りの度合いに

よって行った。オンラインで参加している学生は通信速度などを理由にカメラをつけなくなった頃から、履修学生から発表学生へのフィードバックコメントが簡潔になることも多くなった。どのようにプレゼンテーションを改善できるかという相談も少なくなっていった。

2.3.2 授業で『世界国尽』を紹介

授業の中で、福澤諭吉先生が明治 2 年に出版した『世界国

尽』のアフリカを紹介した。巻2「アフリカ」は、1862年遣欧使節団の一員として福澤先生がヨーロッパを目指していたとき、エジプトの首都カイロに2泊した経験に基づいて書かれている。

収録されたアフリカ地図では、沿岸部の国名・地名は比較的正確なもの、大陸の大半は「さほら大砂漠」、「そうだん(スーダンのあたり)」、「ゑちをびや(エチオピア地域)」となっている。アフリカ内陸部の情報が不足していたことは明らかである。これは、19世紀はじめまでポルトガル、フランス、イギリスがアフリカの沿岸部(もろこ、きぼうほう、けいぶたをん、もごんぴく)と貿易を行っていたためである(齋藤, 2017)。

齋藤によると、19世紀中ごろになると探検家のリビングストーンやスタンレーがアフリカ内部の豊富な天然資源に着目し、資源の採集地あるいは市場としてアフリカに注目するようになっていた(齋藤, 2017)。

『世界国尽』を紹介するきっかけは、履修選抜課題において、「アフリカが貧しい」「アフリカでは教育が必要」といったステレオタイプが頻繁に見られたためである。初年度は、国際協力機構(JICA)の当時のアフリカ部長を招き、アフリカの現場からの生の声を届けることを試みたが、学生たちの固定観念を短期間で払拭することは困難であった。

コロナ禍の開講2年目、上記のステレオタイプを払拭するため、『ポバティー・インク あなたの寄付の不都合な真実』を上映した。マスクを着用した学生たちは、熱心に映画に見入っていた。しかし、90分の授業時間に対して、映画の上映時間が長すぎる点が課題であった。

3年目からは、『世界国尽』を紹介する方針へと転換したが、映画上映時ほどのインパクトはなかった。「福澤論吉先生の著作」とであるという点が、学生たちの強い関心を引いた。『世界国尽』は地名の当て字と読み方で現在の国名をあてることができるくらい情報の正確さがある一方で、「無知」「伝聞に頼る危険性」についての良い教材であると感じている。現地に足を運んで調査していないために生じるバイアス、思い込みを乗り越えるために自ら見て自ら調べるフィールドワークの重要性にはすぐに気づいてもらえなかったようである。

最近の学生はインターネット(最近ではChatGPTのようなAI)を駆使して調べものをするため、図書館を使った調べものができなかつたり、SFCのメディアセンターに入ることができなかつたりする。そのため、それ以後、授業の中で、メディアセンターの職員にアフリカのテーマについてどのように資料を探すのか、どういう資料が活用できるのか、について授業第2回で講義してもらうことにした。そ

の結果、少しずつではあったが、書籍やメディアセンターの資料を活用したプレゼンテーションの出席が増えるようになり、また書籍によっては貸出記録もつくようになった。

2.3.3 地域の環境課題と感染症という身近な話題

授業の中で、環境というテーマも取り扱った。学生のプレゼンテーションを中心に進めていたため、講義ではないが、アフリカの森林と感染症(具体的にはエボラウイルス)は関連していること、森林減少で感染症が増えることに危機感を抱いていることを学生に話している。

国連食糧農業機関(FAO)によると、アフリカの森林面積は6億7442万ヘクタールで、毎年3900万ヘクタールが消失している。これは、毎年0.58%の森林が消失していることを意味する(FAO, 2020)。増え続ける人口を食べさせるための開墾や調理のための薪が、主な森林伐採の原因とされている(マグランら, 2023)。森林伐採によって、森林の断片化が進み、森林面積が減少している。これは、エッジ効果と呼ばれる現象で、人間と接する森林断面あるいは周長が増えることで、森林の中にあったウイルス、バクテリアを含む動植物が人間の生活圏内と接触する場面が増えることである。例えば、ダニによって媒介されるライム病、ハマダラカによって媒介されるマラリア、コウモリが持っていると言われるエボラ出血熱のエボラウイルスなどが人間にうつることになる。実際、毎年3~4種類の新感染症が発生しており、そのうち6~7割は、新型コロナウイルス感染症同様に動物由来であると言われている。野生動物と人間の接点が増えると、野生動物から人間にうつる感染症も増える。動物と人間の健康を一緒に考えなければならないワンヘルスの重要性が主張されるゆえんである。

人々が資源や食料を求めて森林に入り込むと、生物多様性が損なわれることもある。そして、ここでも感染症の原因となるウイルスが人間にうつるリスクが高くなる。反対に、森林を適切に守り、野生動物と人間の距離が保たれば、感染症リスクが低減できるだけでなく、二酸化炭素の吸収もできる。と、この話をすると一気に教室中の集中力が高まる。

このようなつながりや連鎖は、アフリカに限ったものではない。したがって、「地域政策」授業においては、アフリカ地域のほかに中南米地域、東南・南アジア地域も取り上げている。グローバルサウスと呼ばれる地域に対して幅広く、多角的な視点を持つとともに、資源の地政学的リスクを理解し、それに対応できるような行動力を持つ学生を育成することは、意義深い。

2.4 「地域政策」履修の結果

「地域研究」を履修した学生の中に、アフリカ地域に対する意識と理解が芽生え、入門の次の「SFC アフリカ研究会」に加わった学生もいた。「地域政策」や「アフリカ研究会」の卒業生は、国際協力に関連する大学院に進学したり、国際協力機構の職員になったり、途上国関係のスタートアップに従事したりするようになった。「地域政策」の授業に触発され、学生たちはフィールドワークに積極的に参加するようになったのも収穫である。例えば、2019年夏にはコートジボワールを1名の学生が単独で訪問した。2020年3月には、特別研究授業としてケニアとルワンダへのフィールドワークを実施し、10名の学生が参加した。コロナ禍後の2023年9月には、ガーナへのフィールドワークに5名の学生が参加した。同年12月、学期中にもかかわらず3名の学生がタンザニアに渡航している。渡航中に撮影、帰国後に編集したビデオがある。<https://youtu.be/xcvJyqVIP4w?si=xHxh8laYHyL1gyhd>

3. 考察

学生は5年間SFCの「地域政策」という授業で、アフリカ地域の教育、保健医療、文化(音楽やファッション)、自然環境と農業、インフラと経済発展、人口増加と都市化、アフリカの経済(輸出入)、インフラ(エネルギー、水、交通)、雇用・労働と移民、知恵と技術革新について学んだ。欧米、中国、日本の対アフリカ地域政策について考えたことは、以下の理由から重要である。

3.1 アフリカで慶應義塾が目指す未来先導

「地域政策」の授業を通じての個人の変化の一例として、ある学生を取り上げたい。

英語が苦手でパスポートを持っていなかったある学生は、「地域政策」を履修したことをきっかけに、特別研究プロジェクトと一緒にガーナへ行くことになった。ガーナの子どもたちにスマホのパズルゲームのやり方を教え、パズルをやる子どもたちの様子を観察したという。また、ゴミの山で生計を立てている若者とサッカーをする中で、プラスチックのぞうりを履いてごみの埋め立て地のようなグラウンドを走り回る子どもたちと「運動靴を履いていても足を取られる！」自身との違いを、体験を通して実感したようであった。

この学生は、アフリカの子どもたちは質の高い数学教材に触れる機会が少ないことを知って、本教員が契約満了で退職すると同時に、休学してプログラミングの専門学校へ通い始めた。将来的には、アフリカの子どもたち向けのパズルアプリを開発したり、数学的センスを磨く教材を開発

したりすることを筆者は期待している。

さらに、ゴミでアートを作り、地域のための資金集めを行っている日本人アーティストとつながり、インターンとして働くなど、積極的に自分にできることを探していたところ地元近くのゴミ捨て場が気になったようだった。成人式のために帰省した際、地元の政治家や行政と連携しようとするなど、地域社会への貢献にも意欲を示している。

授業を通して慶應義塾の目指す未来を先導するリーダーや起業家を育成し、イノベーション人材の育成につながったと言える。

3.2 安全保障の観点：全員が安全でなければ、誰一人として安全ではない

“No one is safe until everyone is safe”という言葉は、元GAVI事務局長のSeth Berkley氏によるものである。「2.3.3 地域の環境課題と感染症という身近な話題」で記述したように、森林減少が感染症の出現とつながっている。コロナ禍を世界中で経験したことからも、情報や交通が密になり、つながっている今だからこそ、一国、一地域のみならず、個人のみならず、地球環境を含めた規模で健康安全保障を考える必要がある。

3.3 歴史の観点：歴史を繰り返さないために

福澤諭吉先生が『世界国尽』を出版した際、アフリカの地下に眠る資源についてまだ知られていなかった。アフリカ内陸部の資源について知られるようになると、英仏独が一方向的にアフリカ大陸を人為的に分割し、植民地統治をした。アフリカ国家の独立が続いた1960年代、その後の米・英・北欧諸国や日本による開発援助の時代を経て、今再び中ロが経済支配している可能性があることを、地域政策を通して知り、そして学びを掘り下げることで再びアフリカの取り合いにならないように考えていく必要がある。

3.4 持続可能な社会の実現に向けて

アフリカ地域研究は、アフリカが抱える課題と可能性を明らかにすることで、持続可能な社会の実現に向けた道筋を示唆することができると考えられる。アフリカは、比較的シンプルな村型社会構造で、ステークホルダーや既得権益が見えやすく、調査をする上で単純化したモデルをつくりやすい。モデルづくりをしてその動きや効果を検証することが比較的簡単にできることも利点といえるのではないだろうか。

また、地域政策を履修した学生が気づいているように、アフリカでは人口が増え諸問題も起きているが、若いアフリカ人口がICTを活用して、これまで先進国と言われて

きた国々を簡単に飛び越えていくことになる、と言われて
いる(椿, 2021)。

日本は2022年時点、1億2500万人で超高齢社会であり
(総務省統計局, 2022)、アフリカは14億人がいて、60%
以上が25歳以下である(World Economic Forum, 2023)。
アフリカの若い力を持続可能な世界に利用しない手はない。

3.5 自らのアイデンティティを確認する

アフリカ地域研究は、アフリカが国際社会の中で置かれて
いる状況を理解し、国際社会におけるアフリカの位置づけ
を明確にする。世界の問題は複雑化していて、構造から直
さなければならないもの、構造を変えてもそのほかの外部
条件があって結果につながらないもの、どうしても足りない
要素がアフリカ内、日本内で調達できないために変化させ
ることができないもの、いろいろある。しかし、アフリ
カは貧しい、アフリカの子どもがかわいそうだ、という同
情だけでは、課題は解決しない。

一筋縄に行かないこと、一人でできないことは皆でやれ
ばいい。「早く行きたければひとりで行け。遠くまで行き
たければみんなで行け。」というアフリカのことわざの通
り、個人の「得意」や「技術」だけで達成できないことは
力を合わせることで可能となる。

日本で生まれ育った日本の学生、日本にいる国際学生、
社会人経験したのち学生になった学生など、SFCのキャ
ンパスも多様になってきた。いろいろな民(族)がいる環
境を体験することで多様な価値観や行動を見て自らを振り
返り、強み弱みを理解して未来に対する戦略を立てること
ができるようになる。アフリカをフィールドにいざ学べ。

参考文献

- FAO (2020) “Global Forest Resources Assessment 2020”. <https://www.fao.org/forest-resources-assessment/2020/en/> (2024年5月30日アクセス)
- World Economic Forum (2023) “How Africa’s youth will drive global growth”. <https://www.weforum.org/agenda/2023/08/africa-youth-global-growth-digital-economy/> (2024年5月30日アクセス)
- 慶應義塾大学 SFC (2022) 「総合政策学をひらく」 <https://www.sfc.keio.ac.jp/enh-pm/> (2024年5月30日アクセス)
- 齋藤秀彦編著(2017)『福澤諭吉の『世界国尽』で世界を学ぶ
七五調でうたっておぼえる世界の地理と歴史』ミネルヴァ書
房. p.38-45.
- 総務省統計局(2022)「人口推計(2022年(令和4年)10月1日現在)」
<https://www.stat.go.jp/data/jinsui/2022np/index.html> (2024
年5月30日アクセス)
- 椿進(2021)『超加速経済アフリカ: LEAPFROG で変わる未来の
ビジネス地図』東洋経済新報社.
- マグラ、G., デュブレソン、A., ニノ、O., 鳥取絹子訳(2023)
『新版 地図で見るアフリカハンドブック』原書房.

2025年追記: アフリカへの関心を行動に変えた、とい
う報告が次々と聞かれるようになった。加藤貴昭さんと慶
應義塾大学野球部の初アフリカ遠征について三田評論の記
事をご参照いただきたい。 <https://www.mita-hyoron.keio.ac.jp/other/202411-5.html>

遠征について学生が撮影・編集した『ガーナ甲子園
2024 ドキュメンタリー 慶大野球部とアフリカの未来を創
る』 <https://youtu.be/fJJ9eEerYyk?si=3e8RZrlpak0JhXJi>
もある。

[受付日 2024. 6. 4]

[採録日 2024. 11. 20]